

比較を視点とした文体の形成に関する研究(平成14年度研究プロジェクト報告)

著者	森 正人, 坂田 一浩, 頼 雲荘, 隈元 貞広, 高口 圭轉
雑誌名	熊本大学社会文化研究
巻	1
ページ	180-189
発行年	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/2465

比較を視点とした文体の形成に関する研究

森 正人・坂田一浩・頼 雲荘
隈元貞広・高口圭轉

はじめに

(1) 研究の目的

本報告は、日本語学、日本文学、英語学、英文学とそれぞれ少しずつ専門分野を異にする者が、文体の形成という課題のもとに共同で進めてきた研究の成果の一部である。

本研究は、次のような目的をもって始められた。第1に、日本語および英語の文体のそれぞれの歴史的展開を視野に収めながら、それぞれの言語が接触し、移入した他の言語との関係のなかで、あるいは異なる言語間で翻訳し翻訳される関係のなかで、そこに営まれる文体形成の諸相を明らかにし、あわせて具体的に特定のジャンル、言語資料、作家あるいは作品につき、文体の特徴を析出しようとした。第2に、他の言語との接触、他の言語の移入に関して事情を異にする日本語の場合と英語の場合における文体の形成の様相を相互に対照するとともに、それを通してそれぞれの特徴を明らかにしようとした。第3に、日本語日本文学および英語英文学における文体研究の位置付けおよび方法上の課題について、情報と意見を交換し、それぞれの文体研究の方法の錬磨を試みようとした。

(2) 研究の計画と経過

上記の目的のもとに、各研究分担者はまずそれぞれの研究分野に関連ある課題を次のように分担して研究を進めることとした。

森 正人 (社会文化科学研究科教授)	古代日本文学の文体および研究の総括
坂田一浩 (社会文化科学研究科1年)	中世日本語の文体
頼 雲荘 (社会文化科学研究科1年)	近代日本文学の文体
隈元貞広 (社会文化科学研究科教授)	中期英語英文学の文体
高口圭轉 (社会文化科学研究科1年)	19世紀英文学の文体

各研究分担者は、それぞれの課題について研究を行うとともに、全員が会合してそれぞれの研究計画、研究の視点・方法及び成果について報告を行った。その報告にもとづいて質疑応答、意見交換を行った。

以下に掲げるのは、各研究分担者がそれぞれの課題について、その視点・方法および成果の一部について簡潔にまとめたものである。いずれも、近い将来研究論文として発表される予定である。

1. 古代仏教説話集の文体

森 正 人

仏教における説話の機能といえは、教理のための「譬喩」であり、仏教の歴史、儀礼や戒律等の由来としての「因縁」であり、あるいは教義の「例証」である。僧侶たちは説法の席でこうした説話を

駆使し、またそのように利用するための説話を収集して説話集を編んだ。編まれた説話集が、「因縁集」とか「験記」とか称されるのは、それらの説話の期待される機能に対する命名である。たとえば私聚百因縁集、名大本百因縁集、因縁抄（西教寺正蔵蔵）など、「因縁」を冠する説話集も多い。また、本朝法華験記は日本の法華経にかかわる霊験を集めた書で、法華経の教義の例証集と見なされ、地蔵菩薩霊験記も地蔵の霊験の実例集である。譬喩を名乗る、あるいは譬喩譚のみを集めた説話集は管見に入らない。

いま、「験記」を名乗る説話集およびそれらと類同する説話集の表現の方法について考察する観点を設定し、若干の予備的考察を加えようとするものである。

日本における「験記」の最古例は葉恒撰「本朝法華験記」（10世紀成立、佚）とされるが、現存するものうちでは鎮源撰「本朝法華験記」（1040-44年成立）が最も古い。ただし、「験記」を名乗る仏教書は海彼で編まれており、鎮源撰の法華験記序には宋の義寂撰の「法華験記」を規模としたと記す。薬師寺の景戒撰の日本靈異記（9世紀初成立）上巻序には、みずからの著述の先蹤として唐の冥報記（7世紀中葉成立）および般若験記の名を挙げている。

験記であれ、靈異記であれ、これらの著述はいずれも書名に「記」の語を含み、それは事実をありのままに叙述する文体をそなえているということを示している。^(注1)では、「験記」はなぜ「記」でなければならなかったのか。それは、「験記」に記されたことがらが確かな事実であることによって、はじめて教義についての例証として機能しうるからである。

こうして、ここに仏教説話集の文体を分析する視点が得られる。すなわち、仏教における霊験が、どのようにして記述されたことがらに事実性を付与しようとしているかということが、文体を大きく規定するであろう。

ここで、日本靈異記が序文に言及し、舞台を中国と日本と異にするのみで同巧の少なからぬ説話を共有する冥報記について、その叙述の姿勢と表現の方法を一瞥しよう。冥報記に収められた説話は、序文によれば「具 [つぶ] さに受くる所及び聞見の由縁を陳 [の] ぶ。言は文を飾らず、事は揚確を専 [もは] らにす」とあるように、撰者唐臨が伝え聞いたところ見聞きしたことがらを簡潔的確に述べるという立場を明らかにしている。実際、冥報記各説話本文の末尾には、細字で「此の寺は臨の外祖齊公の立つる所にして常に遊観すべし。毎 [つね] に舅氏の説くを聞くに尔 [しか] 云へり」（上巻第二）、「大安は妻夏侯氏なり。即ち朗州刺史殉の妹なり。殉の先づ臨が為に説けり。後に大安が兄の子道裕大理卿たり、亦説きて尔云へり」（中巻第八）のような注記を加えて、そのことがらが、当事者や身近に見聞した関係者の説くところであることを示している。その説いたのが信の置ける人であること、複数の証言者のあることを合わせ示しているのは、叙述内容の真实性を強調するものである。^(注2)

日本古代の説話集もまた、記述して伝えるべきことがらが見聞に属することをいう。

聊 [いささ] か側 [ほの] かに聞くことを注 [しる] し（日本靈異記上巻序）

口伝を謬 [あやま] り注し（日本靈異記中巻序）

ところが、日本靈異記はそのことを語り伝えた人や筆者にいたる伝承の経路についてほとんど何も記さない。とすれば、説話内容の確かさは一体何によって支えられているのであろうか。ここに、日本靈異記の表現性の問題が浮上してくる。

霊験譚はまず、そのことがらが偶然のできごとでなく仏法の確かな「験」であることを、説話の構

成自体に示そうとする。すなわち、説話のなかに靈験の証拠が必ず示される。たとえば、冥報記中巻第八は、旅の宿で李大安が従者に刺されたもののかろうじて命をとりとめたという説話である。大安は息絶えて夢のなかで、金の仏像が僧の姿となり、大安の刺されたところを撫でて去るという体験をする。去って行く僧の背の袈裟に紅の布で小さな補修がしてあるのが見えて、その後蘇ったという。さて、留守宅の妻は大安のために仏像を描かせた。ところが像の背に一点の朱が落ちて汚れてしまい、どうしても汚れを除くことはできなかった。こうして、妻の描かせた仏こそ大安を救った僧であった。視覚的に強い印象を残すこうした描写が、靈験の真実性を支えているといえよう。

そして、こうした叙法は日本靈異記にも見いだされる。中巻第三十四、貧しい孤独な女が観音像に福を祈願する。すると、その里の豊かな男が求愛し、二人は結ばれる。その間雨が降り続いて、女は男に食事を出すことができない。女はまた、観音に財を願う。そこへ、隣の豊かな家の乳母が食事を持ってきてくれた。女は謝礼として自分の黒い衣を渡した。後日女が改めて隣家に礼に行くと、知らないと言う。そこで、女が観音堂に行くと、黒い衣が像に掛かっていた。

この黒い衣もまた、利益をこうむった当事者に真実を告げる手だてであり、読者に靈験を信じさせる証拠である。そうした証拠は小さいけれども、至って印象的に配置されている。吉祥天像に掛けられた衣と裳（中巻第十四）、馬の脚に染みついた屎〔くそ〕（中巻第四二）など。これは仮名文の仏教説話集にも継承されていく。

日中の仏教説話の構成と表現の方法の共通性を確かめて、続く考察は後日に譲る。

（注1）「記」とは中国の文体の一種で、事実をそのまま記すものという意である。

（注2）こうした叙法は、唐代の伝奇小説にもしばしば見られるところであって、「離魂記」「任氏伝」「李娃伝」等がそうである。

2. 中世日本語における漢語の文法的機能 — 「定（ぢやう）」という語を例に—

坂田 一 浩

一般に、日本語が外来の語彙を名詞以外の品詞として取り込む場合は、例えば、「感じる」「莫大な」「急に」などのように和語語素を後接させるのが常である。

ところが、院政期以降、漢語がそのままの形で副詞や接続（助）詞に相当する機能を果たしているとみられるものが徐々に増加してくる。その一つの事例としてここでは「定（ぢやう）」をとりあげ、それが文法的機能を担うに至った過程と、このような現象が意味するものについていささか検討を加えてみようと思う。

そもそも「定」という語は、規定、範囲といった意味をもつ名詞であったものが、

わごぜは今様は上手でありけるよ。このぢやうでは舞もさだめてよかるらむ。（平家物語 巻一）

己が蹴ナンニハ生カン定辛クテコソ生カメ。必ズ蹴侍ラン。（今昔物語集 巻二十三）

のように程度、限界を表す形式名詞としての用法を生じ、さらに

唐にわたりて、ひさしき定、三年、さらずは、それより近くもまで来なむ。（成尋阿闍梨母集）

大名一人と申すは、勢のすくないぢやう、五百騎におとるは候はず。（平家物語 巻五）

小兵といふぢやう十二束三ぶせ、弓はつよし、（同 巻十一）

上の諸例が「・・・の場合でも」「・・・ではあるけれども」と訳し得ることからも窺われるように、接続助詞化ともいふべき様相をも呈するに至ったものである。

「定」のこのような経緯は、和語名詞「あひだ」「ほど」「ゆゑ」が形式名詞を経て、助詞の助けを借りずに接続助詞化する過程と軌を一にするものがある。

ところで「定」はまた、古典中国語においては、

陳王定死。(陳王定めて死なん。)(史記 項羽紀)

のように動詞等を修飾する副用語としても機能するものであった。そして中世末の日本語においてもこの語は、

さらう時には、余祭としたらばぢやう合ふべきぞ(史記抄 卷十)

上の例が示すように、「かならず」という意味の副詞として現れているのであるが、ここで注目すべきは、それが「に」「と」などの助辞を下接することなくそのままの形態で副詞として機能し、さらにそれが文末辞と密接に関わる陳述副詞であるということである。

漢語が日本語の文において和語語素を下接することなしに文法的機能を担い得るようになったという、以上みてきたような現象の背後には、記録語体の発達および和文体との交渉という事実があるものと思われる。一種の変体漢文である記録語体は、和文体に比べて助辞の明示を避けようとする傾向が強い。「定」の接続助詞化は、このような環境において醸成され、「ゆゑ」などの和語名詞と同様の経過を辿ったものであると考えられる。

このことは「定」の副詞化に関してもいえるのであり、日本語文において「随分」「大抵」「格別」「別段」といった漢語がそのままの形で副詞として機能し得るのもやはり同様の理由から説明されるであろう。

今回取り上げた「定」という語のふるまいは、日本語における、記録語体の発達を媒介とした漢語の機能性を象徴的に示すものと考えられるのである。

3. 太宰治の文体を中国語訳するときの問題点一『斜陽』の場合

頼 雲 莊

『斜陽』は、戦後の昭和22年7～10月『新潮』に発表された作品で、没落した貴族—お母さま、かず子、直治一家のストーリーを語る小説である。『斜陽』の登場人物が没落貴族として設定され、その登場人物は不自然な敬語を使っていることがしばしば指摘されてきた。敬語の使用によって作り出された特殊な雰囲気が『斜陽』全体を流れている。

『斜陽』の第一節は、朝食の場面から語り出されていた。

朝、食堂でスープを一さじ、すっと吸ってお母さまが、

「あ」

と幽かな叫び声をおあげになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ」

お母さまは、何事もなかったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの

場合、決して誇張ではない。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っていらっしやる。

この一節を次のように中国語に翻訳するものがある。

早晨正在飯廳裡專注、輕快的喝湯的母親突然：「啊！」的低叫了一聲。

「有頭髮嗎？」我想該不會是湯裡有什麼怪東西吧？

「沒有！」

媽媽儼然沒有發生任何事一般、還是繼續一口一口將碗中的湯輕巧的送入嘴裡、滿不在乎的將臉別向一旁、眼睛望著窗外盛開的山櫻花、然後頭也不回的繼續飛快一匙一匙的將湯送進小巧的唇間。「飛快」這個形容詞對母親來說、一點也不誇張、雖然母親的喝法和婦女雜誌上刊載的優雅用餐禮儀大相逕庭。

この一幕が中国語に翻訳される時に、いちばん目立つのは敬語表現がほとんど消えていることである。作者の太宰はここで語り手に語らせると同時に、その語り方によって語り手自身の人物像をも描いている。語り手は敬語を使う女性である。敬語の使用は表現の対象に敬意などを払うばかりでなく、話し手自身の社会的地位や教養などを表わす働きがある。「お母さま」という呼び方が中国語に翻訳されたときに「母親」か「媽媽」（この中国語訳版の場合「母親」と「媽媽」との使い方は単純な言い換えと考えられる）という表現しかできない。「お母さま」という言葉遣いの含意が、翻訳されたと同時に消えてしまう。結局、語り手がどういう身分で、どの程度の教養の持ち主であるかは、読み取れなくなっている。

『斜陽』は、語り手の語りによって全文が紡がれ、しかもその語りには独特の女性独白体が用いられていた。しかし、この女性語り手の言葉遣いのなかでもっとも重要と見なされる敬語表現が、中国語に翻訳される時に表出できず、それによって、『斜陽』の作品世界の雰囲気は違ってくる。極端に言えば、『斜陽』においてはお母さま、かず子、直治3人とも「言葉」で作られた貴族である。かず子だけではなく、お母さま、直治の中国語版の語りには、敬語表現がほとんど表れてこない。言葉の階級性—敬語表現をはっきり示すことのできない中国語訳にあっては、登場人物たちの階級性を表出することに力が薄弱すぎる。原作『斜陽』の作り出した貴族感覚は、中国語訳を通しては伝わりにくい。

また、波線の「我想」は原作にない主語が書き加えられた部分である。「スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った」と、確かに「思った」が書かれているから、その動作主の存在を暗示している。しかし、原作『斜陽』ではその動作主を明示的に表出していない。しかし、中国語文においては、「想」という動詞一語のみを主語ぬきに用いることはできない。中国語訳では、「我」が書き加えられ、「想」の主語になった。はっきりしていない主語を明確に「我」という第一人称に翻訳した。主語抜きで動詞だけを置ける日本語の特徴は、中国語に翻訳する時に姿を変えなければならない。つまり、センテンスを成立させるために、訳者はその動詞を消すか、主語を入れるかどうかかを選ばなければならないのである。この訳本の訳者は後者を選択した。それによって、ここで勝手に語り手=かず子というふうに翻訳されている。語りの文体を通して小説の作者が作りだしてい

た、一種の曖昧性を抹殺した。これは、冒頭部だけではなく、本文全体の問題として取り上げることができる。

そのほか、太宰は小説を書くときによく使う片かな文字の表記を活用している。『斜陽』もその例外ではない。しかし、それも中国語訳と同時に消えていく。例えば、作中の直治の「夕顔日記」には次のような箇所がある。

オユルシ下サイ。イマ、イチドダケ、オユルシクダサイ。

原諒我吧！現在、就這一刻、請原諒我這一次吧！（中国語訳）

このように中国語に訳されると、作家が意図的に片仮名で書いた部分のニュアンスが消えてしまう。その片仮名で表現しようとする直治の感情の微妙な動きが翻訳されていない。片仮名による表現は、漢字だけの中国語に翻訳するすべがない。このほか「ウソ」、「ヤケクソ」や「イヤ」などの表記も同様である。

中国語訳『斜陽』の場合、3人の登場人物について「貴族」というイメージを築くことに不十分なところがある。それゆえに、『斜陽』の主題—「滅び」を表現するために必要不可欠な要素を欠いている。したがって、中国語版の『斜陽』は、原作『斜陽』より一味落ちていると言わざるをえない。

以上を通じて明らかになったことは、日本人作家の太宰は日本語という言語の特性を最大限に生かし、言葉で小説を綴るだけでなく、言葉自体に花を咲かせて作品を飾るのである。太宰の言葉の使い方は翻訳という方法では再現できないものであり、少なくとも中国語で忠実に再現できないものであるといえるだろう。その再現しがたい表現の方法を明らかにすること、それが今後の研究の課題である。

テキスト：『斜陽』角川文庫1950年8月15日

『斜陽』周敏珠訳小知堂文化事業有限公司（台湾・台北）2001年5月

4. 中英語ロマンスにおける描写語彙と表現：フランス語作品との比較

隈元貞広

中英語ロマンスの多くはフランス語作品の翻案という形でイギリスに採り入れられ、後にチョーサーの作品で一つの完成を見る。そのような中英語ロマンスの描写の中心となるのが騎士や婦人等の人物描写である。フランス語作品との比較を通して見ることでそのような人物描写における英語作品固有の部分が浮き彫りになってくる。それは中英語ロマンスにおける描写要素の受容、変容、発展の問題であり、興味深いテーマである。

具体的には、騎士や貴婦人の外観その他の physical な美しさ、内面的特性、行為や振る舞い、喜びや悲しみの感情、心理の動き等の描写における語彙、比喩表現、描写視点、文構造から観察できる。S. Wyler は「美しさ」の概念場に属する中英語期の形容詞を調査し、その時期にロマンス語的思想とともに新しい美しさの理想も入ってきたが、そこで用いられる語彙は主として英語本来語であり、新しい語彙による補充、置き換えは二次的な働きしかしないという結論にいたり、古英語以来受け継がれている英語語彙の有機的発達を示唆している¹。Wyler は「美しさ」の概念場で核心をなす一次的形

容詞群の中で最も際立っている語として 'fair' を指摘しているが、中英語ロマンスにおける貴婦人の描写においても同様で、その形容詞が最も意味が広く、また最も頻度が高く、貴婦人の「美しさ」を描写する語彙構造は、その形容詞によって表される 'fairness' という general な概念を表す語の下位概念語群からなっていると言える。つまり、具体的な美しさを表す語彙群が 'fair' の下位レベルにあり、さらにその下位に一層具体的な視点から描く語彙群があるという構造になっている。例えば、婦人の外面的美しさは次のように描かれる：

In world is noon so *fair* a wight,

For yong she was, and hewed *bright*. (RR 1029-30)

ここでは general な美しさと輝きの要素を含む美しさを表す描写語が用いられているが、さらに具体的な下位概念である形や色その他の要素を含む語も次のように用いられる：

Hir face *whit* and *wel coloured*,

With *litel* mouth and *round* to see.

A *clove chynne* eke hadde she. (RR 548-50)

描写価値においてこのように幾つかのレベルに分けられるこれらの描写語彙（形容詞、副詞が中心となる）は語源的には英語本来語、ロマンス系の語、および古ノルド語であり、それら3種類の語彙の全体的な種類数および頻度、さらに概念場グループに分けた上での語彙種類数および頻度数の分布も観察する必要がある。全体として言えることは、語彙の構造から見れば、general な描写価値を持つ語彙は英語本来語に多いのに対して、具体的な美しさの描写はロマンス系の語に頼るところが大きい。すなわち、フランス語作品から借入された語群が英語詩行にあって美しさの具体的な描写に寄与しているということである。例えば *The Romaunt of the Rose* という作品におけるこれらの語彙の分布は、全32種類（66回）のうち英語本来語が16種類（39回）、ロマンス系語が11種類（21回）、古ノルド語が3種類（3回）となっている。このような場合、類義語の使い分けも問題になる（'bright' と 'cler', 'tendre' と 'softe' など）。

The Romaunt of the Rose の人物描写以外も含めた全体的な語や表現に関して Geissman (1952)² や Eckhardt (1984)³ は、その英語作品がフランス語原典よりも 'vivid' で 'specific'、あるいは、より 'colourful' で 'visible'、また 'audible' であることを指摘しているが、上述してきたような描写語彙に関してはむしろ英語作品の方がより意味の広い語を用いているというむしろ逆の傾向があり、さらに資料を拡大して調べる必要がある。また、このような描写・文体の研究として既に刊行されている Curry (1916)⁴、Ganguli (1940)⁵ 等の研究とも比較検討しなければならない。さらにそのような形容詞を中心とした語に伴う比喩表現も英仏作品間に共通した部分と異なる部分があり、比較研究の必要がある。そのような比較考察、検討を通して、中英語ロマンス語彙と表現に対するフランス語作品の影響の質的・量的面、また英語作品独自の語彙・表現の創出と発展を明らかにすることができるものと思われる。

注：

1. Siegfried Wyler, "Die Adjective des mittlenglischen Schönheitsfeldes unter besonderer Berücksichtigung Chaucers: Ein Begriff in seiner sprachlichen Gestaltung", Ph.D. (Universität Zürich, 1944)

2. Erwin W. Geissman, "The Style and Technique of Chaucer's Translations from French", Ph. D. (Yale University, 1952)
3. Caroline D. Eckhardt, "The Art of Translation in *The Romaunt of the Rose*", *Studies in the Age of Chaucer*, Vol. 6 (1984), pp. 41-63
4. Walter C. Curry, *The Middle English Ideal of Personal Beauty: As Found in the Metrical Romances, Chronicles, and Legends of the XIII, XIV, and XV Centuries* (Baltimore: J. H. Furst Company, 1916)
5. Sukumar Ganguli, "A Study of Chaucer's Diction and Terms for Womanly Beauty", Ph. D. (London University, 1940)

5. Charles Dickens の文体の特徴

高口圭轉

本プロジェクト研究においては、英国を代表する作家である Charles Dickens (1812-1870) の言語および文体を研究している。18世紀の散文および口語の伝統を引き継ぎ、19世紀において、散文の一つの頂点に達した Dickens の言語は、様々な語学的、文体的な特徴や要素を備えており、各作品に登場する人物や主題も多種多様である。そのような Dickens の言語の多様性や文体のメカニズムを明らかにするために、まず個々の作品を対象に、精密な分析を加えるとともに、作品間の文体の変化や発達を比較検討することによって、Dickens の言語の本質を探り出したいと考えている。

Dickens の言語・文体を分析する重要な先行研究書として、T. Yamamoto (1950) *Growth and System of the Language of Dickens*, G. L. Brook (1970) *The Language of Dickens*, K. Sørensen (1985) *Charles Dickens: Linguistic Innovator* を挙げることができる。これら3つの研究書のいずれにおいても、norm からの逸脱 (deviation)、imaginative かつ creative な特質を示す繰り返し (repetition) という2つの言語特性が、Dickens の言語や文体を探る有力な手がかりとして指摘されている。しかし、上記3つの研究書を含む他の研究書においても、deviation と repetition という言語特性に注目した分析は十分に行われていない。それゆえ、本研究では、deviation と repetition という2つの言語特性、さらにこの2つの特質と深く関連する、speech presentation, participant items, word frequency, collocation などにも注目し、Dickens の言語と表現の内的な要因を探り、その言語表現の意味と構造を明らかにしていきたい。分析に際しては、電子テキストやコンピュータを利用した数量的・統計的な分析はもちろんのこと、作品を丹念に読むことによって、作品間における文体の変化や発達、repetition と deviation という言語特性の質の違いなどに注目する。

repetition と deviation に関する具体例を、*A Tale of Two Cities* (1859) から挙げてみる。

A large cask of *wine* had been dropped and broken, in the street. The accident had happened in getting it out of a cart; the cask had tumbled out with a run, the hoops had burst, and it lay on the stones just outside the door of *the wine-shop*, shattered like a walnut-shell.

All the people within reach had suspended their business, or their idleness, to run to the spot and drink *the wine*. . . . Some men knelt down, made scoops of their two hands joined, and sipped, or tried to help women, who bent over their shoulders, to sip, before *the wine* had all run out between their fingers. Others, men and women, dipped in the puddles with little mugs of

mutilated earthenware, or even with handkerchiefs from women's heads, which were squeezed dry into infants' mouths; others made small mud embankments, to stem *the wine* as it ran; others, directed by lookers-on up at high windows, darted here and there, to cut off little streams of *wine* that started away in new directions; others devoted themselves to the sodden and lee-dyed pieces of the cask, licking, and even champing *the moister wine-rotted fragments* with eager relish. . . .

The wine was *red wine*, and had stained the ground of the narrow street in the suburb of Saint Antoine, in Paris, where it was spilled. It had stained many hands, too, and many faces, and many naked feet, and many wooden shoes. The hands of the man who sawed the wood, left red marks on the billets; and the forehead of the woman who nursed her baby, was stained with the stain of the old rag she wound about her head again. Those who had been greedy with the staves of the cask, had acquired a tigerish smear about the mouth; and one tall joker so bemirched, his head more out of a long squalid bag of a night-cap than in it, scrawled upon a wall with his finger dipped in muddy wine- lees — BLOOD. (Bk. II, Ch. 21)

上の引用は、*A Tale of Two Cities* において、wine という語の120回の使用数のうち、3分の1近くの37回が使用されている Bk. II, Ch. 21 に見られるものである。この引用は、革命の中心地となる Saint Antoine にある Defarge の酒場の前でワインの樽が壊れ、そこから流れ出たワインが道路を赤く染め、そのこぼれたワインを周りにいた人々がすすり飲む場面を描いている。この引用では、イタリック体で示した wine という語の繰り返しとともに、その周りには、下線を施した、ギロチンによる残忍な行為を暗示する語句や、革命に伴う殺戮、流血などを暗示する語句が散りばめられている。革命勃発後に、多くの人々がギロチンの露と消え、多量の blood が流されることを考えあわせると、この場面での wine およびその関連語の繰り返しは象徴的な意味合いをもち、流血の革命の勃発という来るべき運命を暗示しているようである。

次に、同じく *A Tale of Two Cities* から、deviation の例として、フランス人の登場人物が話すフランス語がそのまま英語に置き換えられている、いわば英語化されたフランス語、Anglicized French expressions の使用例を挙げてみる。

- (1) “Say, then, my Gaspard, what do you do there ?” (Bk. I, Ch. 5)
[Defarge's speech] cf: *Dites donc, mon Gaspard, que faites-vous lá ?*
- (2) “What the devil do you do in that galley there ?” (Bk. I, Ch. 5)
[Defarge's speech] cf: *Que faites-vous dans cette galère ?*
- (3) “Monsieur Charles, whom I expect; is he arrived from England ?” (Bk. II, Ch. 8)
[Marquis' speech] cf. *est-il arrivé d' Angleterre ?*
- (4) “. . . , the sun going to bed, . . .” (Bk. II, Ch. 15)
[a road mender's speech] cf. *à soleil couché*
- (5) “Good day, monsieur.” (Bk. II, Ch. 16)
[Madame Defarge's speech] cf. *Bonjour*

英語に言い替えられたフランス語の使用は、*Bleak House* (1852-3) の Hortense や *Little Dorrit* (1855-7) の Rigaud などの人物の言葉や inner dialogue においても試みられているが、本作品では、登場人物の characterization に関係するだけでなく、さらに作品全体の構成や主題とも深く関わっている。つまり、Dickens は、フランス語を英語にそのまま言い替えることによって、英語とフランス語との違いおよび関連性、言い替えれば、作品のタイトルにある 2つの都市の間の違いおよび関連性を示唆しようとしているように思われる。

repetition と deviation は、Dickens の言語や文体を探求する上で、重要な言語的特徴であり、今後は考察する作品を広げ、作品間における質の違いについて分析を積み重ねることによって、exhaustive な Dickens の言語および文体の研究を目指していく。